

# もと の ばる い せき 本 野 原 遺 跡

県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2004

田野町教育委員会

## 目 次

1・遺跡の位置	1
2・歴史的環境	2
3・検出遺構	3
竪穴住居	3
列状掘立柱建物	4
窪地遺構	6
中央配石	11
竪穴状遺構	11
環状土坑群	12
埋甕	13
南東部土器廃棄場	13
道路状遺構	15
出土遺物	15
4・その他の時代	16



写真1 鹿頭形土製品（1960年採集）

## 1・遺跡の位置

本野原遺跡は、九州東南部にある宮崎県の南側にあり、県央部日向灘沿いの宮崎市と、鹿児島県境の都城市との中間地点にある田野町の南部に位置する。遺跡の標高は180m前後であり、河川の合流点に向かって、激しく起伏しながら舌状に伸びる台地の東端部に立地している。



第1図 本野原遺跡位置図



2図 調査区周辺地形図

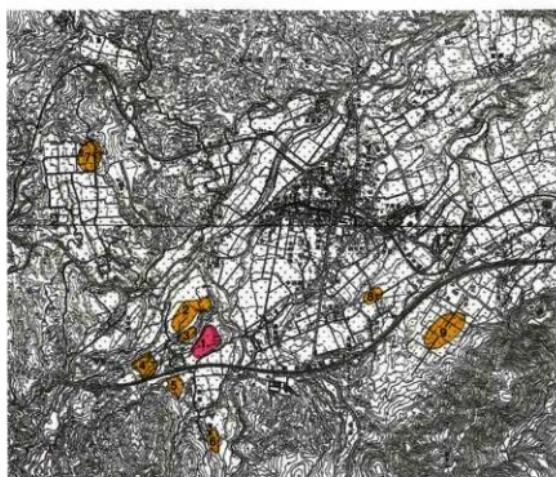
## 2・歴史的環境

本野原遺跡を含む一帯（黒草・楠原・元野地区）は、縄文時代を中心とする遺跡が密集する地域である。

元野地区の南側にあたる楠原地区の河岸段丘左岸には畠田遺跡、その西北側の湧水点付近には黒草第2遺跡、北隣の小河川合流点周辺には元野河内遺跡、本遺跡の川を挟んで北側には本野（ほんの）遺跡、更に一段上がった台地中央部には高野原遺跡が立地する。それぞれの遺跡から確認された遺物の時期を照合した結果が表1である。これを見

ると、本野原遺跡の立地する元野地区及びその周辺は、縄文時代早期にピークがあり、旧石器・縄文時代を通して、継続的に遺物が残される状況を認めることができる。

なお、本野原遺跡で主体を成す縄文後期の遺跡は、元野地区では隣接する高野原遺跡のみであるが、七野地区の丸野第2遺跡では31軒の竪穴住居を検出したほか、仏堂園地区的青木遺跡では大型の扁平砾による敷石住居址を検出するなど、田野盆地は、縄文後期も遺跡の密集する地点であったと考えられる。



第3図 本野原遺跡周辺の遺跡分布図

- 1, 本野原遺跡 2, 高野原遺跡 3, 本野遺跡
- 4, 元野河内遺跡 5, 黒草第2遺跡 6, 畠田遺跡
- 7, 丸野第2遺跡 8, 青木遺跡 9, 前平地区遺跡群



写真2 青木遺跡検出敷石住居址

表1 本野原遺跡周辺に分布する遺跡の時期対照表

	旧石器 細石器文化期	縄文時代										弥生時代		古墳時代		歴史時代	
		前期	中期	後期	前期	中期	後半	後半	初頭	前期	中期	後期	前期	中期	後期	古代	中世
元野・黒草・楠原地区	本野原	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	高野原	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	本野																
	元野河内																
	黒草第2	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	畠田				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
周辺地区	丸野第2		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	青木		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

■ 多量(50点以上)出土 ■ 中量(50点未満、5点以上)出土 ■ 少量(5点未満)出土

### 3・検出遺構

本野原遺跡からは、竪穴住居、列状掘立柱建物、窪地遺構、中央配石、竪穴状遺構、環状土坑群、道路状遺構、埋甕等が検出された。以下、遺構毎に説明を加えたい。

#### 竪穴住居

窪地遺構の北側及び東側から、合計113軒検出された。平面形態は主に方形と円形であった。遺構中央は比較的大ぶりの土坑が検出されることが多かったが、炭や焼土の混入は少なかったことから、炉としての機能を積極的に肯定するものではなかった。また、両脇にピットを伴う中央土坑の検出も多かったが、これは縄文後期における、南九州の基本的な竪穴住居の内部構造である。なお、貼床や硬化面の確認は非常に少なかった。また、遺構覆土からは多くの土器が出土したが、いずれも覆土上層であり、床面付近からはごく少量であった。なお、土器は小片が多く、復元可能な個体に乏しかった。

検出された竪穴住居の軒数は、西日本でこれまで調査された縄文時代の集落としては最も多い数である。しかし、殆どの構築時期は中期末から後期前葉であり、窪地遺構が構築・維持されたと考えられる後期中葉は検出数が激減し、後葉から晩期前葉は認められない。



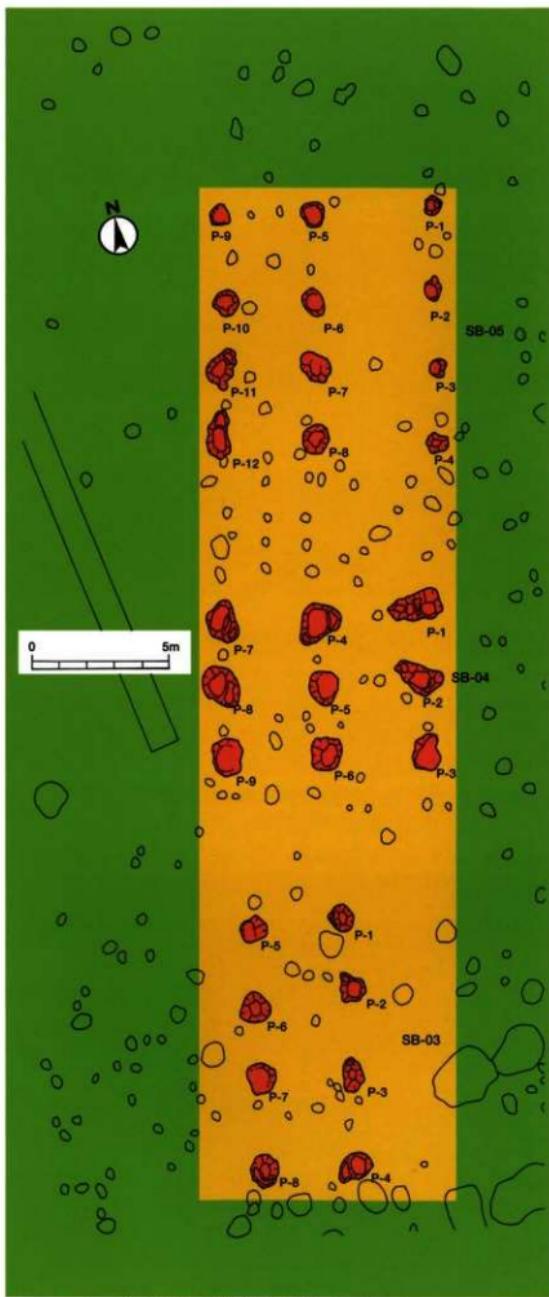
写真3 竪穴住居検出状況 (SA-13)



写真4 竪穴住居検出住居 (SA-01)



写真5 竪穴住居検出状況 (東側住居群)



#### 列状掘立柱建物

C区北側では、60cm×60cm程の大ぶりの土坑が、磁北から約15~20°ずれた方向に2~3列並んだ状況が確認できた。土坑は深いもので1m近くに達しており、開墾による削平を考慮すると、本来は更に30~50cmほど深かったと考えられる。また、その規則的な配置は、南から4基×2列、3基×3列、4基×3列のまとまりを見ることができる。

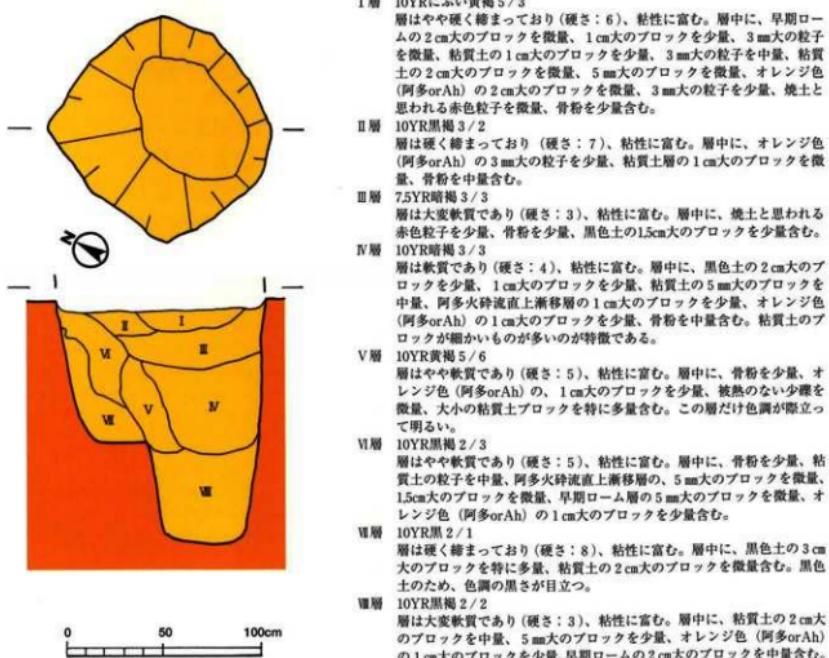
このような配置は、掘立柱建物の存在を想起させるものである。木柱の検出がなかった点や、遺構底面に硬化面が認められなかった点は疑問が残るが、土層断面を見ると激しく切り合っていることから、何度も建て替えが行われたために、硬化面が形成されなかつたと考えられる。なお、掘り込まれた際の生活面が削平されていることから、これらの遺構が竪穴を伴っていたか否かは不明である。

また、この遺構群に重複して、小ぶりの掘立柱建物による列状の配置も認められた。大型の列状掘立柱建物との時間的関係は現在のところ不明であるが、列状掘立柱建物は、規模を変えながらも複数の時期にわたって存在したことが確認された。なお、大型の掘立柱建物の覆土中出土土器は小片ばかりであるが、岩崎式後半から指宿式の時期には統一されていたことから、竪穴住居の最盛期と同時期に存在した可能性が考えられる。

第4図 列状掘立柱建物実測図（大型のみ）



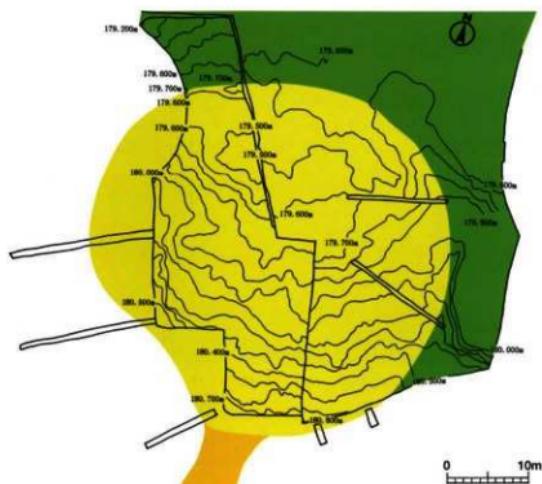
写真 6 列状掘立柱建物検出状況



第5図 SB-04 P-6 土層断面図

### 窪地遺構

縄文後期包含層を取り除いた時点で、10cm単位の等高線図を作成したところ、一部環状に巡る土坑群にかかりながら、C区南部全体に緩やかな窪地が形成されていることを確認した。C区東部では、等高線の湾曲に沿ってアカホヤ火山灰層が不自然に消失しており、西側に行くにつれ、堆積年代の古い層が露出していた。一方、排土置き場に



第6図 窪地遺構内等高線図及び予想範囲



写真7 窪地遺構南東部検出状況

設定したトレンチでは、東へ傾斜する地点でアカホヤ火山灰層が消失し、東側に行くほど堆積年代の古い層が露出していた。土層の消失は、C・D区がクランク状に接する部分が最も顕著で、約9万5千年前から10万年前に降灰した阿多火碎流の漸移層にまで達している。このような土層堆積から、断面が掘り鉢状を呈する削平行行為を想定することが可能である。土層消失部は、南北が開墾時に削平されているが、およそ径80~100mの、南西部が抉れた円形を呈していたと予想される。

整地前は、北東へ緩やかに傾斜する地形であったと考えられるが、調査区内及び周辺の土層の検討から、阿多火碎流降灰から小林降下軽石降灰までの数万年は、土層が堆積しなかったと予想される。中でも、2万5千年前に分厚く降灰した姶良丹沢火山灰が、自然作用によって流出している点は非常に特徴的であることから、縄文後期の土層消失も、雨水などの影響を考慮せざるにはいられない。しかし、土層の消失は雨水の影響を受けずに堆積した小林硬化軽石や、非常に硬い牛のスネローム層にまで及んでいるうえに、消失は局地的であり、雨水の流路も認められず、検出面には縄文後期包含層が直接堆積していることから、包含層堆積前の縄文後期に「土木工事」が行われたと判断するに至った。

さて、問題は整地の際に生じた、3,000m<sup>3</sup>以上と見積もられる排土の行方である。調査では、排土が窪地遺構の周囲をドーナツ状に取り囲んだ「環状盛土遺構」は検出されなかつたが、窪地遺構東側の傾斜面では、縄文後期の遺物を含みながら、早期ロームや粘質土など、下層のブロックが混入する層が分厚く認められたほか、東側堅穴住居群の上位にも、開墾による削平を受けてなお、約50cmも残存する縄文後期の遺物包含層が認められた。また、C区北部の縄文後期包含層からも、整地と共に浮き上がり混入したと考えられる縄文早期の加栗山式・小牧3A段階が一定量出土した。以上の情報はいずれも断片的であり、全体形や堆積状況は不明であるものの、排土は窪地遺構の東側や北側など、標高の低い地点に移動したと考えられる。

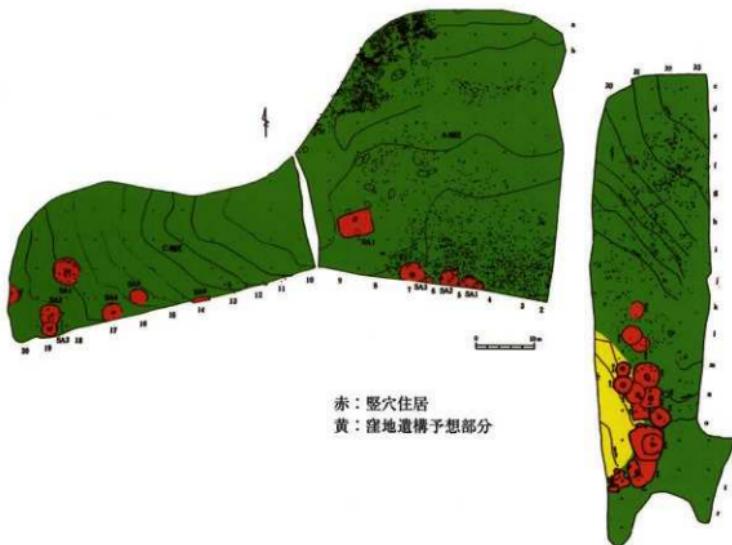
なお、窪地遺構の検出面直上は丸尾式が多く出土したことから、窪地遺構は後期後葉に埋没し始めたと考えられる。一方、窪地遺構を取り囲む環状土坑群の覆土中出土土器は市来I・II式を主体としている。この時期差は、遺構が埋没しないよう、一定期間維持された可能性を示すものである。これを考慮した上で、第6図に堆積状況の変遷模式図を表した。

窪地遺構は、栃木県寺野東遺跡の調査を契機として、関東地方で類例が増加中であり、環状盛土遺構と併せて土木工事の象徴的形態と考えられている。九州という遠隔地において、このような土木工事が検出されたことは極めて珍しく、驚くべき事例と言える。なお、九州で土木工事が把握できた遺跡としては、横峯遺跡（鹿児島県屋久町）を挙げることができる。遺構の全体形がL字状と予想されることや、遺構内に堅穴住居が集中している点は異なるものの、出土遺物は後期中葉から後葉を主体としており、本野原遺跡と整地時期が重なるほか、礫を伴った土坑の検出など、共通点も認められる。また、本野原遺跡北方に位置する丸野第2遺跡のB地区においても、堅穴住居の分布による「弧」の内側において

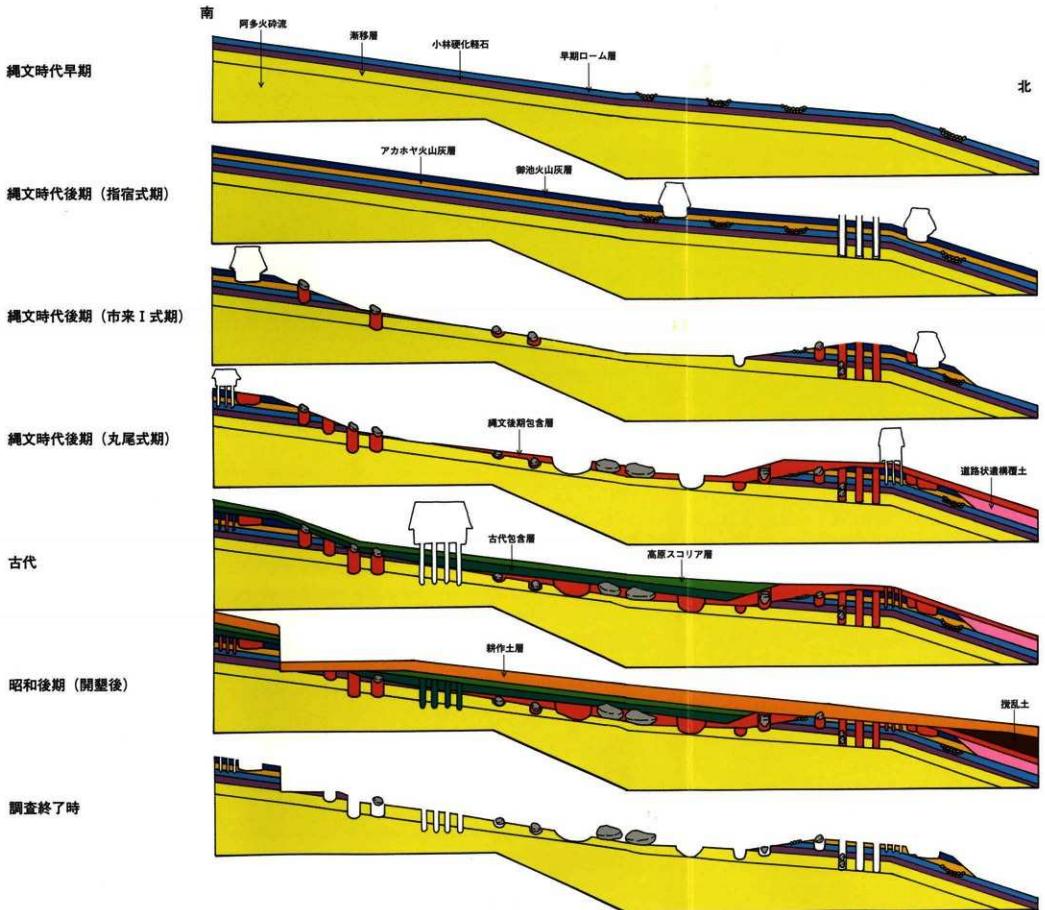
て、等高線の不自然な湾曲や、アカホヤ火山灰層の消失が認められた。遺跡の最盛期も指宿式から市来式と、本野原遺跡の窪地遺構と時期的に近いことから、近距離にある2つの遺跡の間には、共有する文化的情報が存在したと考えられる。

(本書で用いた参考文献)

- 鈴木重治 1963 「宮崎県宮崎郡田野町青木遺跡」『日本考古学年報』16  
田野町教育委員会 1990 「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第11集  
坂本嘉弘 1994 「埋甕から甕棺へ－九州縄文埋甕考－」『古文化談叢』第32号  
江原 英 1999 「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例」『研究紀要』第7号  
田野町教育委員会 2000 「高野原遺跡B・C区(1)」(掘立柱建物図面・図版編)  
『田野町文化財調査報告書』第35集  
前迫亮一 2002 「南の磨消縄文土器」『犬飼徹夫先生古稀記念論集』  
水之江和同 2002 「九州の縄文集落」『犬飼徹夫先生古稀記念論集』  
上村俊雄・中園聰・大西智和・金子愛 2003  
「屋久島横峯遺跡5次調査の成果－縄文時代後期集落の整地の可能性をめぐって－」  
『人類史研究会第14回大会発表予稿集』



第7図 丸野第2遺跡A～C地区遺構分布図



約10万年前に、阿多火砕流が降灰した。火砕流は、元野地区一番に厚く堆積し、本野原台地では斜面を形成した。この火山灰層は、層中に礫を多く巻き込んでいたために流出を免れた。約2.5万年前に降灰した姶良丹沢火砕流は、侵食により本野原台地の斜面にそって調査区外に流出した。約1.5万年前に降灰した小林硬化軽石は、硬質であるため流出がある程度防がれた。その上位に縄文早期ローム層が堆積する中、調査区内は、縄文早期に集石遺構が盛んに構築された。

後に牛のヌスローム層となる大隅硬化軽石が降灰し、ついでアカホヤ火山灰、御池火山灰が降灰した。この後、調査区北部を中心として、中期後業から集落が営まれ始めた。指宿式期には、集落は暮盛期を迎える。列状掘立柱建物も構築された。この時期、南東部傾斜面において、土器の一括発掘が行われた。

列状掘立柱建物が埋設した後、C・D区南側において往々100mの範囲内に木工事が行われた。断面形は窪地状を呈しており、中央部は約1.5mも削られ、阿多火砕流の直上にまで達していた。その際、縄文早期の集石遺構は、包含層と共に破壊を受けた。なお、土木工事により生じた堆土は、南東部傾斜面等に移動したと予想される。この時期に伴う集落は、指宿式期と比べて急速に衰退し、市来Ⅱ・Ⅲ期には完全に姿を消す。また、市来Ⅱ・Ⅲ期は削平外縁に土坑が多く構築された。

大型の窪が配置される。窪地遺構内は、丸尾式期に至るまで土層の堆積がなかったが、道跡範囲確認トレース部に集落の中心が移動した丸尾式後半以降から、窪地遺構内は土器を含みながら土層が堆積するようになる。なお、この堆積は、窪地内部より外側の方が厚い傾向にある。窪地向タイプ期には、大型の窪周辺に穴状遺構が構築される。また、黒色磨研土器期には埋甕も構築された。

窪地遺構内を中心として、古代包含層が堆積する。この間、古代の掘立柱建物、及び竪穴住居が構築された。なお、この図では掘立柱建物は高麗スコリアの上位に構築されているが、実際の上下関係は逆である。

文明硬化軽石が降灰した後、戦後行われた大規模な開墾により、調査区周辺の地形も大きく変化した。窪地遺構内側は文明硬化軽石層まで削平されたのみであったが、窪地遺構外縁部では、北部は平坦に削り取られ、南部は段が設けられた。

第8図 土層堆積状況模式図

### 中央配石

窪地遺構の中央部付近から検出された。10個の礫が、径約5mの円形を呈するように配されており、遺構を構成する礫のうち7個は、人力では移動が不可能なほどの大ささであった。礫は土坑を伴っていなかったことから、遺跡営続時から既に横倒しにされていたと考えられる。

礫の表面を観察すると、表面が光沢を有するほど研磨されたものや、稜上に著しい敲打痕が認められるものがあったが、このような痕跡は、石皿や磨石等の使用痕とは根本的に異なるものであった。遺構の検出位置が窪地遺構の中央部付近にあることから、祭祀行為に伴った施設であると考えられる。

なお、遺構周辺は、土坑等の遺構の分布が希薄であるばかりでなく、遺物も殆ど認められなかった。



写真8 中央配石検出状況

### 竪穴状遺構

C・D区の境界部がクランク状に接する地点に検出された窪地遺構中央付近の検出面は窪地遺構内の堆積層であり、窪地遺構の埋没中に構築されたと考えられる。遺構は当初竪穴住居と想定したが、床面が著しく凹凸しており、壁面も明瞭でないこと、更に、内部構造も明確な柱穴に乏しかったことから、別種の遺構と判断するに至った。

遺構覆土からは、主に丸尾式後期を中心として多くの遺物が確認されたが、なかでも特徴的であったのは台付皿形土器であり、残存状況は良好ではないものの、数個体が出土する場合もあった。遺構が中央配石を取り囲むように配されていたことを考え合わせても、何らかの祭祀に伴う施設であったと考えられよう。

覆土は縄文後期の遺物包含層と大差なく、ソイルマークの識別は困難である。また、炭化物等の混入はなかった。



写真9 竪穴状遺構検出状況（SX-04）



写真10 土坑検出状況 (SC-218)



写真11 土坑検出状況 (SC-100)



写真12 土坑検出状況 (SC-207)

#### 環状土坑群

窪地遺構内には、数百基の土坑・ビットが環状を呈して分布する。平面形態・深さ共に多くの種類があり、複数の用途が存在したと考えられる。この内、及び断面が垂直に下がるものや、規則的な配置が見られるもの、遺構上部の礫が柱を固定するように配置されているものは、掘立柱建物である可能性が高い。ほかに、遺構上部に礫を持ち、また、袋状を呈するものは貯蔵穴と考えられるほか、大ぶりのものや、一部袋状となるものは、墓壙である可能性が考えられる。

また、礫を持つ、比較的浅い土坑も多く検出した。分布に建物を思わせるような規則性は見当たらず、礫には敲打痕等人为的な加工の痕跡が認められるものが多かったことから、立石として区分した。

土坑は、土坑墓および環状掘立柱建物群が窪地遺構外縁に分布するのに対し、立石はその内側に多い。更に内側には竪穴状遺構が、中心部には中央配石が分布しており、窪地遺構内の検出遺構は、同心円状にカテゴライズされた配列が認められる。

### 埋甕

2基検出した。1基は調査区北東部の竪穴住居集中部付近であり、土坑上部に北側に傾いた状態で検出された。土器は底部を欠損していた。土器型式は指宿式であり、九州で検出された埋甕としては最も古い段階のものである。

もう1基は窪地遺構中心部からやや東側の地点であり、土坑上部に垂直に立てられた状態で検出された。土器はやはり底部を打ち欠かれていた。晩期の粗製深鉢であった。検出作業時、付近から精製浅鉢が出土していることから、本来は蓋を伴っていた可能性も考えられる。



写真13 埋甕検出状況（埋甕-01）

### 南東部土器廃棄場

C区南東部は、本来湧水点に向け東側に大きく傾斜していたが、この周辺は縄文後期の遺物包含層が分厚く堆積しており、層中からは、土器が集中的に出土した。堆積層は上下2層に分層が可能である。御池火山灰層上位で認められた黒色土は、調査区東壁で約30cm堆積し、後期前葉の指宿式・岩崎式を中心として、残存状態の良好な土器が高密に出土した。また、その上位の茶褐色土も、黒色土と同じく約30cm堆積していたが、早期ローム層や粘質土層のブロックを多く混入しており、出土土器は比較的小片が多く、指宿式・岩崎式を主体としながら、後期後葉の丸尾式に至るまで、幅広い時期が確認された。この土質の違いは、下層は土器を一括廃棄する際に堆積したと考えられるのに対し、上層は西側に隣接する窪地遺構を構築する際の排土で構成されたためと考えられる。



写真14 南東部土器廃棄場検出状況



写真15 出土土器写真 (SA-72内)



写真19 出土土器写真 (SA-86内)



写真16 出土土器写真 (南東部土器廃棄場)



写真20 出土土器写真 (南東部土器廃棄場)



写真17 出土土器写真 (南東部土器廃棄場)

写真21 出土土器写真 (南東部土器廃棄場)



写真18 出土土器写真 (南東部土器廃棄場)

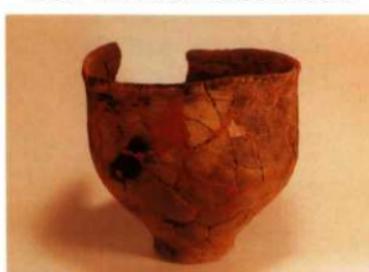


写真22 出土土器写真 (SC-73内)

## 道路状遺構

北側で検出された道路状遺構は、自然に形成された谷状の地形に沿って構築されており、アカホヤ火山灰層を掘り込んで早期ローム層中で幅数メートルの平坦面を持ったまま北への傾斜が認められた。また、底面は著しく硬化していたばかりでなく、検出面付近は牛のスネローム層が堆積しており、遺構の構築にあたって硬い層を敷設したと考えられる。この遺構は、約20m離れた北部でも、その延長が認められたことから、道路として使用された遺構と考えられる。遺構の延長線上には小河川があることから、川と集落及び窪地遺構を繋ぐ目的で構築されたと考えられる。なお、遺構覆土は納屋向タイプなど後期末の土器の小片が多く確認され、埋没時に周辺から流れ込んだと考えられる。

道路状遺構は、窪地遺構南側に設定したトレンチの断面からも確認された。アカホヤ火山灰層から急角度で掘り込まれており、小林硬化軽石で数mの幅を持つ平坦面に達する。硬化面は認められなかったが、小林硬化軽石が硬化面の役割を果たしたと考えられる。延長上の台地縁辺部には湧水点があることから、遺構は湧水点と集落及び窪地遺構を繋ぐ目的で構築されたと考えられる。なお、覆土からは多くの土器片が確認されたが、いずれも小片であるため、遺構の埋没時期は現在のところ不明である。

## 出土遺物

本遺跡からは、中期末から晩期にかけて、非常に多くの遺物が出土した。

中期末から後期初頭に位置付けられる阿高式・岩崎式初期は、堅穴住居覆土上層から良好な残存状態で出土することが多かった反面、遺物包含層からの出土は僅かであった。

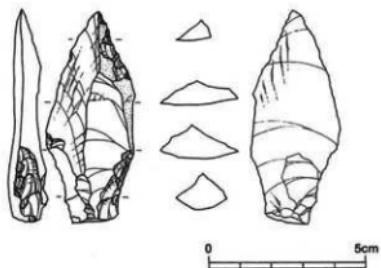
これに対し、後続する岩崎式後期は堅穴住居覆土からの出土状況は悪いが、遺物包含層からの出土は多くなる。なお、この時期に一部併行すると考えられる指宿式は、遺跡からの出土土器としては最も多くの割合を占ており、復元可能な資料の多い南東部土器廃棄場だけでなく、堅穴住居内や遺物包含層から大量に確認されている。

しかし、遺物の出土は市来I・II式には減少し、環状土坑群等遺構内から出土することが多くなる。丸尾A式になると、窪地遺構検出面からの出土が多くなり、晩期末の納屋向タイプになると、窪地遺構内や道路状遺構-01から多く確認されるようになる。しかし、この時期を境として、遺物の出土は激減する。

後期末から晩期初頭にかけて、集落の中心の西側への移動が、遺跡範囲確認トレンチによって確認されている。また、晩期初頭から前業には、更に川を隔てた北岸の高野原地区に移動したことが、調査によって確認されている。

その後、晩期中葉の入佐式がC区北側を中心として出土し、黒川式を経て縄文時代終末期まで、土坑や堅穴住居、窪地遺構堆積層から遺物が出土する。

石器は、土坑から出土することが多く、再利用が考えられる石皿を除けば、出土量は決して多いとは言えない。特に石錐の出土量は50点前後に留まっており、生業を行う上で充分な量ではない。



第9図 出土土器実測図（旧石器時代）



写真23 集石遺構検出状況



第10図 中世遺構配置図

#### 4・その他の時代

本野原遺跡からは、旧石器時代の遺物も確認されている。第9図は剥片尖頭器で、定型的な縦長剥片に基部調整を施すほか、側縁にも、裏面からの調整によって形状を整えようとした意図を窺うことができる。旧石器時代の遺物としては、他に台形（様）石器、細石核等が確認されている。

縄文時代は、後期以前に早期、前期の遺物も一定量確認されている。左の写真は集石遺構である。周縁の一部に扁平な円碟が配される。周辺からは、早期前葉に当たる加栗山式から小牧3A段階が出土していたことから、遺構もこの時期に構築されたと考えられる。なお、調査区内からは早期中葉の集石遺構のコロニーも検出されたほか、妙見式や塞ノ神式の出土も確認されている。

前期の遺物は、深浦式や轟式類似土器の存在である。遺構は確認されていないが、一定量の遺物が出土した。

縄文時代以降は、古代に竪穴住居1軒が構築されたほか、掘立柱建物が2棟、C区南側から検出された。掘立柱建物の北東部に隣接して、土師器や須恵器、布痕土器など古代の土器の集中出土が確認された。

掘立柱建物の分布は、中世にも確認されている。遺物は殆どなく、遺物の重複も殆どないことから、短期間に消滅したと考えられる。なお、柱穴からは洪武通宝が確認された。



写真24 本野原遺跡航空写真（北から）



写真25 検出状況（北西から）

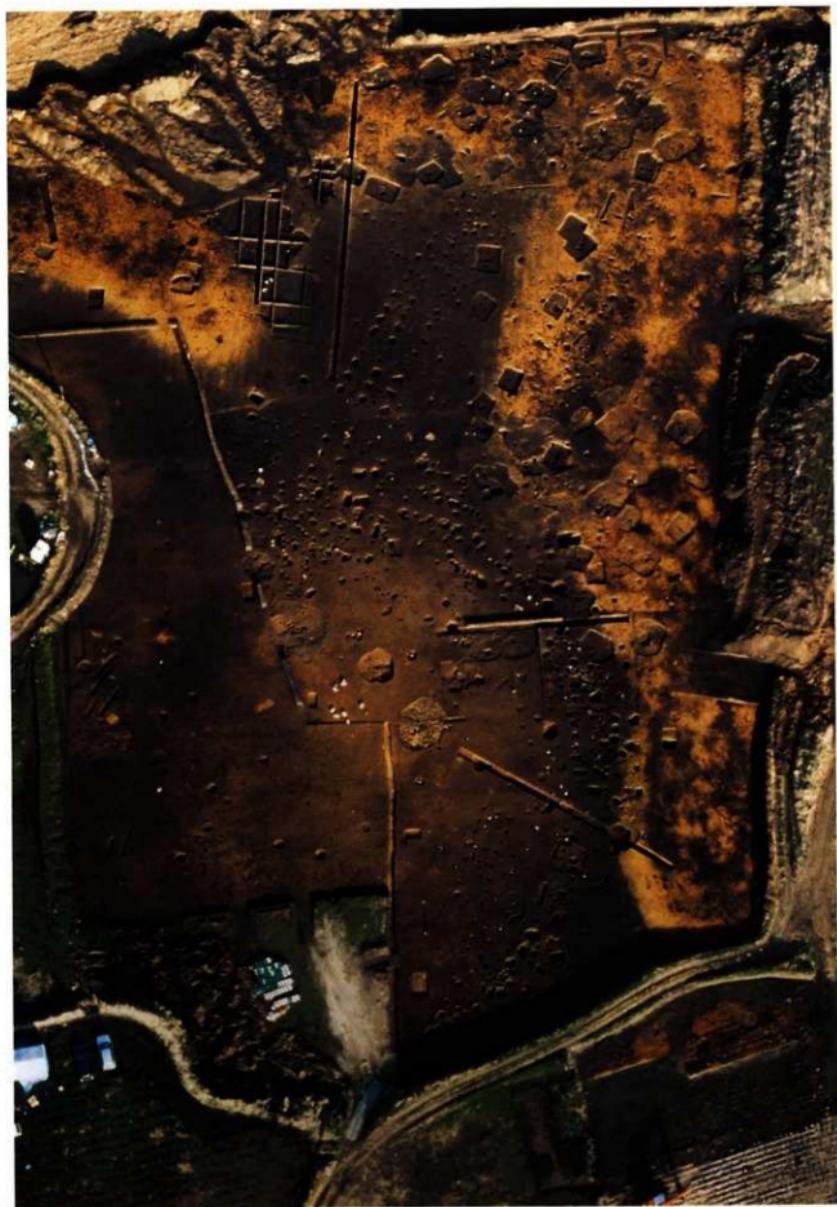
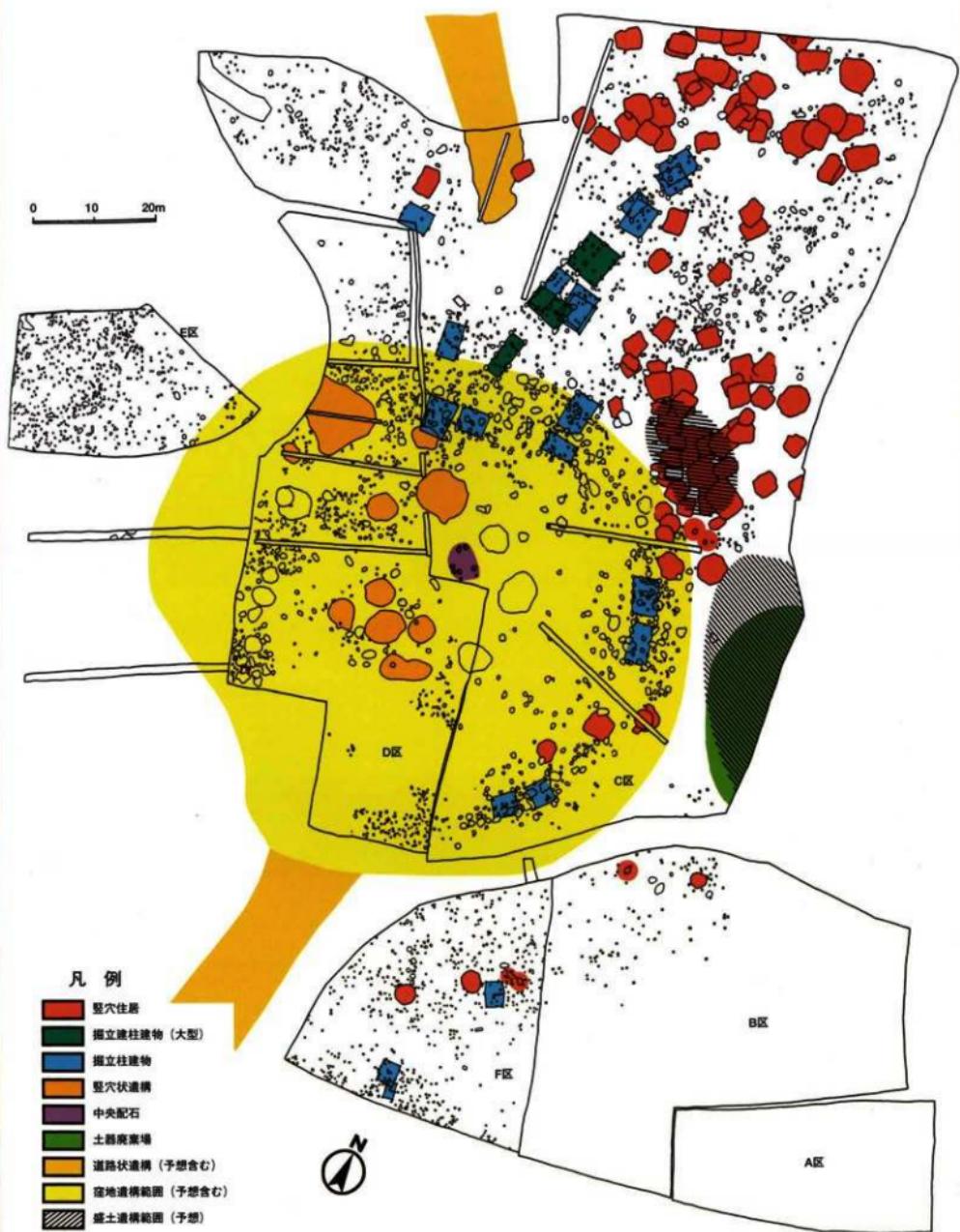


写真26 遺構検出状況



第11図 調査区遺構分布図（縄文後・晩期のみ）

